

7月・8月の管理ポイント

平成23年7月15日



ホームページアドレス
<http://www.tomo-green.com/>

第112号

今年は梅雨入りが各地域で早く、特に九州地域では長期間の豪雨の影響で芝が軟弱、徒長気味になってしまいがちです。梅雨が明ければ1年で最も過酷な時がやってきます。梅雨明け直後の高温、多湿(蒸れ)対策には、当社のレボを、散水過多になりがちなグリーン表面排水に役立てて下さい。

レボ (REVO)

梅雨明け後の根上がり対策に...

梅雨明け後の高温は、土壌中の水分が多いと一気に根上がりしてしまう原因となります。レボを定期散布してある土壌では、土壌中の気層の割合が多いのでこういった症状を軽減できます。

高温なので、ついつい散水し過ぎになってしまいがちな時期ですが、レボ処理で根上がりの原因となる余分な土壌水分を除去しましょう。

使用量：2ml/m² 散布水量：200ml~1L/m² 散布回数：1ヶ月に1回

アクアダクト・アクアダクトSWDG

ドライスポットが発生してしまったら...

ドライスポットが発生してしまったら、治療剤としてアクアダクト、アクアダクトSWDGを発生箇所及びその周辺に散布します(但し、レボを定期散布しているゴルフ場さまはレボの1000倍液をスポット処理して下さい)。アクアダクトSWDGは微粒剤タイプなので、スポット処理には最適で、カップ切りなどの後に処理すると芝の活着が良くなります(SWDGは我が国には無いタイプの細粒製剤で、散水分散型です)。

使用量

アクアダクト：1回目は2.5ml/m²で散布し、回復の状態を見ながら1週間後に1~2.5ml/m²で散布(散布水量0.5~1.0L/m²) アクアダクトSWDG：10~20g/m²を必要に応じて1週間毎に散布

※ 2剤とも非常に安全性が高いが、高温時(気温30℃以上が予想される日中)は控えてください。

コ・エンザ

梅雨時期のストレスのかかった芝生には...

7月中旬までは、降雨が多く、日照不足のため植物内の活性が低下し、芝生が軟弱になります。

コ・エンザ処理により、植物内の酵素反応を円滑にし、弱った芝生の回復に努めましょう。

使用量：ベント1~2g/m² 1L/m²散布 コウライ3~4g/m² 1L/m²散布

スティンガーFL

害虫発生にあわせて...

7月、8月はシバオサゾウムシ、タマナヤガ、スジキリヨトウ、シバツトガの大切な防除シーズンです。

特に鱗羽目(チョウ目)害虫は、発生ピークが長く、数種類が混在して芝生を食害するので殺虫剤のローテーション散布が必要となってきます。食毒効果でグリーンで1ヶ月、ラフ・FWで2ヶ月以上の効果が期待できるスティンガーFLはローテーション散布の基幹剤としてご使用していただけます。

使用量：スティンガーFL 4000倍 0.2L/m²

グリーンメカ・マリンパワー・光合成細菌

芝の呼吸過多による糖消費と土壌菌数の回復に...

7、8月は高温による芝の呼吸量が増加し、糖含有量は1年で最も減少します。糖が少なくなると特に根に影響を与えるので、グリーンメカでしっかり補給していきましょう。

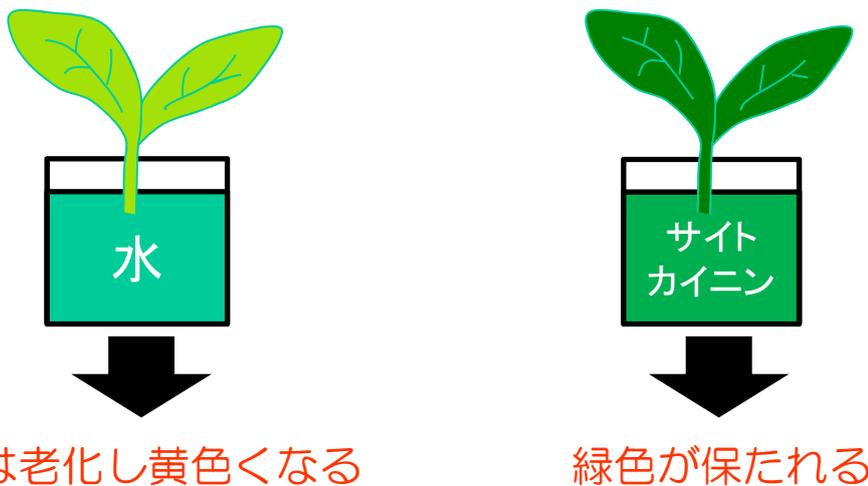
梅雨明け後(7月下旬)は、土壌が高温多湿で酸素不足になり、硫化水素など根に直接影響を与える有害ガスが発生しやすくなります。光合成細菌とマリンパワーを組み合わせることによって、嫌気性の土壌(排水の悪いどぶ臭い土壌)を改善し好気性の有用菌を定着させましょう。

使用量：グリーンメカ 5~10ml/m² マリンパワー 2~4ml/m² 光合成細菌 1~10ml/m² 各 1L/m²以上

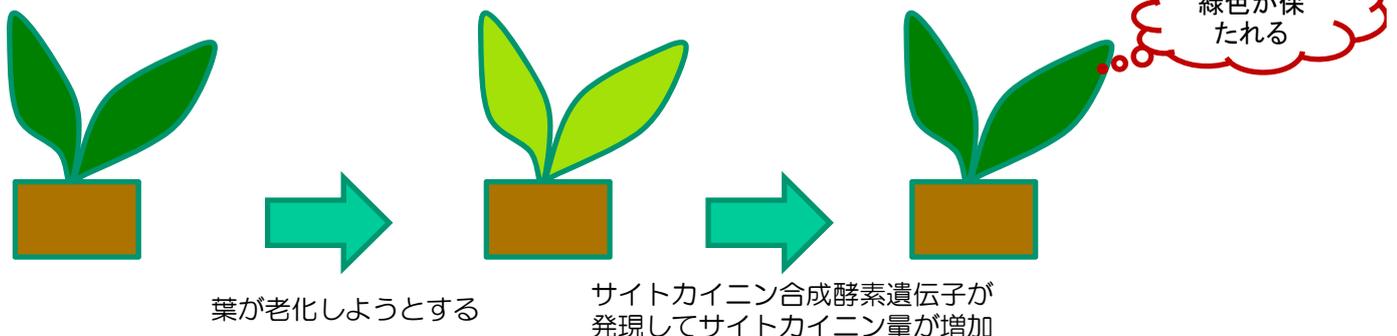
植物の老化抑制作用と植物ホルモンの関係

一般的に、葉の老化時には、葉のサイトカイニン量が減少することが知られています。この反応からサイトカイニンには老化を抑制する作用があることがわかっています。例えば、葉などを植物から切り取って水に挿しておくとも葉は老化するが、サイトカイニンを含んだ水に挿した場合は老化が抑制されます。現在では、サイトカイニンのこのような作用を利用し、遺伝子操作によって老化を抑えた植物がつくられています。

サイトカイニンの老化抑制作用



タバコに導入された老化抑制を目的とした遺伝子組み換え植物の例



サイトカイニン合成酵素遺伝子を植物体内に組み込むことによって、常に老化を抑制できる最低限のサイトカイニン量が保たれるような植物となる。